



猫耳少女は 元情中

ウブな彼女と
極甘エッチな同棲生活

冬房すずや
挿絵/夕海

試し読み版

プロローグ

第一章 子猫と新しい保護者

第二章 淡い恋心

第三章 暗闇のその先へ

第四章 通い合う心

第五章 蜜のように甘く優しい時間

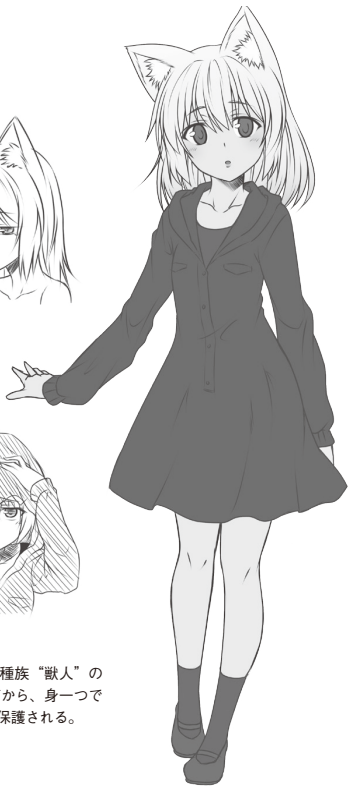
第六章 決着のとき

第七章 明日に架ける橋

エピローグ

登場人物紹介

Characters



つめざと
爪里すみれ

獣と人間との間に位置する種族“獣人”の少女。ある理由で獣人の町から、身一つで逃げ出したところを和馬に保護される。

いちくらかずま
一蔵和馬

祖母が遺した一軒家で暮らす二十八歳。気ままな独身生活を送っていたが、すみれとひとつ屋根の下で同棲することに。

プロローグ

その日墓参りに出かけたことは、和馬わまにとってただの気まぐれでしかなかった。

祖母の月命日だったとはいえ、お盆やお彼岸、法要以外で墓参りする習慣などなかったのに、わざわざ秩父の山間にある祖父母の墓まで出かけようなんて——それこそ普段なら絶対に思わない。

十月近くの秋めいた西日が照らす山道を歩くことしばし——ふいに男の足がびたりと止まる。

彼の目に飛び込んできたのは、道の端で山の斜面にもたれるようにして倒れていた人影だった。

「嘘だろ、おい……!!」

急いで駆け寄ると、それがまだ顔にあどけなさを残すかわいらしい少女であるとわかる。おまけに、非常に目立つ姿をした少女でもあった。

頭頂部には、三角の物体が二つ——猫の耳のようなものがついている。

猫の耳と同じくらい目を引くのは髪の色だろう。セミロングの柔らかそうな髪は、田舎ではまず見ないような白っぽい金色をしていた。

だがその美しい髪はぼさぼさに乱れ、あちこちに葉っぱや小枝が絡まっている。おまけ

に襟元の大きく乱れたブラウスや紺色のスカートはもちろんのこと、顔も靴の履いていない素足も泥ですっかり汚れていた。

どう見ても異常事態だった。暴漢に襲われたかのような有様に息が止まりそうになる。

(まさか死んでる？ ……いや)

青白い顔だし目は閉じられているが、胸がかすかに上下しているので本当に最悪の状態ではないだろう。一時間前にこの道を通ったときは人など倒れていなかったたので、墓参りをしている間に、この山でなにか事件があったことになる。

(悲鳴なんか聞こえなかったけどなあ。ってそんなこと考えてる場合じゃないか)

和馬は線香の箱やライター類が入った紙袋を置くと、そつと少女の肩を揺さぶった。

「おい……大丈夫か？ おい、しつかりしろ！」

反応はない。もつと強く揺さぶろうかと思つたが、頭を打つていた場合を考えるとやめておいたほうが賢明だろう。

「君！ なあ、おい！」

大声で呼びかけるが、気を失っているのかぴくりとも動かない。

(まいったなあ……とりあえず救急車を呼んだほうがいいかも)

そんなことを思いつつ、和馬はふと彼女の頭部についている淡い金色の猫耳に目を留めた。

ファーなどのモコモコした素材を使って大きく誇張された猫耳と違い、片面だけに短い

毛が生えたただけの本物にそっくりな猫耳だ。

(最近の子たちはこういうのが好きなのか?)

一部のマニアに大ウケしそうなそれは、頭の下草や枯れ枝によって軽くひしゃげている。カチューシャなのか髪留めなのかはわからないが、担架などで運ばれるのだとしたら外しておいたほうがいいだろうか。

「えーと……………。ん? どうやって外すんだ、コレ?」

少女の髪を掻き分けるが、バンド部分もヘアピンも見つからない。それどころか、猫耳の根元は頭皮に繋がっているようにも見える。おまけに人肌のぬくもりさえあるような。

「え……………コレ、頭にくっついてる…………?」

まさかと思いつつ和馬が軽く引っ張った途端――。

「ッ!」

少女の身体がびくりと揺れ、眉間に皺が寄った。

ハツとして身を引くと、彼女の目蓋が震え、ゆつくりと目が開かれる。

その瞳を見て、和馬の心臓がどくんと大きく跳ねた。

(すごい……………綺麗な目…………。外国の子か?)

顔立ちは東洋人のそれだが――金色の睫毛の下から現れたのは、透明感のある深い青紫色の瞳。まるで夜明け前の澄んだ空のような色だ。

どこか焦点の合っていない瞳が小刻みに揺れ、ふと和馬のそれと合う。

「は……はろー……？」

思わず英語で挨拶すると、少女の顔が見る見るうちに強張った。やや頬のこけた顔から血の気を引かせて傍目にもわかるほど震えだす。

「ひ……っ?! あ、ああ……ッ……やだ、やだあ……!!」

怯えるように身体を丸め、己を守るように両腕で抱き締める。その姿は暴漢から逃れようとするかのようだ。

第三者が見れば和馬がその暴漢にしか見えないだろう。

「わああ大丈夫なにもしないから！ 大丈夫だから落ち着いて！ ね!!」

和馬は慌てて彼女から離れて両手を上げた。
「俺は偶然通りかかっただけでなにも……君が倒れてたから様子を見てただけで、ほんとになんにもしてないからね？」

「こ………来ないで、ください……っ。お願いです……どうか、どうか……」

日本人だったのか、淡い金髪の少女は、か細い声で日本語を話す。
「わかった、君には近づかないから……。その、怪我はないかい？ 痛いところは？」

これ以上驚かさないうちに穏やかな声を心がけて尋ねると、彼女は首を小さく横に振った。

「そっか。とりあえず……よかった。えっと、家は近いのかな？ 親御さんとか呼んで」「そっ、それはだめです！」

和馬の言葉に少女が初めて大きな声を出した。びっくりしていると、彼女はこちらの視線を避けるようにうつむく。

「あ、あの……それは……だめなんです。絶対に、それだけは………」

「そう、なの？ なにか事情でも——」

そこまで言うのと和馬はひそかに舌打ちした。

（バカか、俺は）

なにか事情があるに決まっている。

襟元の大きく乱れた服に裸足、そしてこの怯えようだ。家族を呼ばれて困るとなれば、身内に、あるいはそれに近い誰かになにかされそうになったのだらうと簡単に想像がつく。

「あの……わたし……大丈夫、です。どうも……ありがとうございました」

彼女は強張った笑みを浮かべると、こちらを警戒するようにそろりと立ち上がる。

だが足を一步踏み出した瞬間、ぐらりと身体が傾いた。

「ちよ、危な……」

思わず和馬が駆け寄ろうとすると、少女はなんとかその場に踏みとどまり、うわずった声を出した。

「だ、大丈夫です！ 本当に、なんでもないです、からッ」

「そんなこと言っても……」

どう見ても大丈夫には見えない。きつとどこか痛めているのだらう。

(本人がどう言おうと——このまま放っておけないよな)

これでは心配するなというほうが無理である。彼女にとっては余計なお世話かもしれないが、少しでも世話を焼かせてもらおう。

そう決心すると、和馬は静かに話しかけた。

「いいかい、今から少し近づくよ？ 絶対になにもしないから。いい？」

「え……………そんな……………」

彼女は一步後ずさり不安そうに胸元をかき寄せるが、こちらの有無を言わさぬ様子を悟ったのか、ややして小さくうなずいた。

相手の気持ちの準備ができたのを見届けてから、和馬はゆっくりとした動きで少女に近づく。あと一メートルというところでその場にかがみ、膝下のスカートから伸びる細い足を見つめた。

草で切ったであろう細かな傷はあるものの、腫れているところは見当たらない。だが足を捻っていることも考えられる。

「うーん……………やっぱ念のため病院に行ったほうがいいと思うんだけど」

「びよ……………!? 病院は……………こ、困ります……………」

しゃがんだままで少女を見上げれば、今までで一番怯えた表情が浮かんでいた。

なんとなく頭部に目を移すと、彼女の心情を映したように猫耳がいわゆるイカ耳——耳が横に引っ張られたようになっていた。

(あの耳が本物だとすれば、そりゃあ病院には行けないよなあ……)

直接触って生え際まで見てしまった以上、猫耳が飾りではないことはもうわかっている。信じられないことではあるが、実際にこの目と手で確認してしまった以上認めざるを得ない。

「じゃあ……君、誰か頼れる人はいる？ これからどこか行くあてはあるの？」

不思議な猫耳少女は、きつと自分の置かれた状況をあらためて思い出したのだろう。ハツと息を呑んでなにか言いたげに口を開くが……結局言葉は出てこなかった。

猫耳を反らせた彼女の顔に途方に暮れたような表情が浮かぶ。

(これはいよいよまいったな……)

薄々予感していたとおりの状況になってしまい、和馬は胸のうちで唸った。

彼女の家族は呼べないし、頼れる人もいない。病院にも行けない。

しかしこのまま、ここに彼女を放置することもできない。

——となれば、できることはひとつ。

「……よし、わかった。病院には行かない。でも君をこのままにしておくことはできないから……とりあえず、うちに来ないかい？」

「……え………えっ？」

きつと予想外の言葉だったのだろう。

意味を理解するとともに彼女の暗く沈んだ目が大きく開かれていった。口も驚いたよう

にぼかんと開いて、それまで痛々しかつた表情が年相応のあどけないものになつていく。その表情を引き出せたことに思いのほか喜んでゐる自分がいた。

「あ、もちろん変なことにはならないからね！ 君には指一本触れない……と言いたところだけど、これから君をおんぶしたり足の様子を見たりはしたいから……少なくとも、君の許可なしに触ることは絶対にしない。このままここにいても日が暮れちゃうし……どうかな？」

「あ………その………でも………」

もう一度尋ねると、彼女は落ち着かない様子で身体を揺らす。

それはそうだろう。見ず知らずの男に家に来ないかと聞かれて、そう簡単に行きますと
言えるわけがない。

でも、彼女ももう自分ではこの状況をどうすることもできないとわかっているはずだ。

傍目にも明らか激しい葛藤の末――。

「本当に………なにも………しない、ですか？」

長い沈黙の後、少女はおずおずと聞いてきた。

「うん。しないよ」

「でも………ご迷惑じゃ………？」

「迷惑なんて全然。勝手気ままな一人暮らしだしね。遠慮はいらないよ」
言ってから和馬は、はたと気づいた。

(いや、それって男と二人きりってことだから余計来づらいんじゃない……)
しまったと思うが後の祭り。だが少女は気づいていないようだ。

「あの……」

「あ、はい！」

「お名前は、なんとおっしゃるんですか……?」

「あ。俺は一蔵いちくらかすま和馬わまって言います」

「一蔵……和馬、様」

かみ締めるように猫耳少女が自分の名前をつぶやく。そして――。

「一蔵様。本当に……もし、ご迷惑ではないのでしたら……。一晩だけ、お家にお邪魔させてもらっても……いいですか?」

胸の前で手を祈るように組み合わせた金髪の少女は、非常に丁寧に頼んできたのだった。
「うん。もちろんいいよ」

様づけされることに妙な気恥ずかしさを感じつつ、即答すると彼女は力が抜けたようにその場にへなへなと座り込んでしまう。

「わ、ちよ、大丈夫?」

「あ……ありがとうございます……ッ」

ほっとしたのか、涙で潤んだ瞳がこちらを見つめてくる。それがなんだかくすぐったいやら照れくさいやらで、和馬は慌てて話題を変えた。



とするが、立派に成長したムスコはとても隠しきれぬはずもなく。

少女は片方の猫耳を軽く後ろに向けると、怯むどころかにつこりと笑った。さらに両膝の間に身体を割り込ませてひざまずくと、グロテスクな肉塊を興味深そうに観察し始める。

「わ……すごい。男のひとのココって……こんなふうになってるんれすね」

「だああ、見ちゃだめだって……！」

肘をついて上体を起き上がらせるが、彼女が足の間にいるので完全に起き上がれない。自分の男根をかわいい女の子に——すみれに見られていると意識した途端、肉棒がさらに嵩を増した。ピキッと歪な血管が表面に浮かび、脈動に合わせてびくびくと震える。

「わあ、またおつきくなった。ふしぎ……どーしてこんなふうになるのかな……？」

「白魚のような指が、つん、と雄をつつく。」

「っ……………！」

それだけの刺激に、全身が硬直した。先端でカウパーがぶくつと雫を作り、そのまま筆を伝い落ちていく。

（や、やばい……このままだとマジでやばい……！）

今にも理性が吹っ飛びそうで、そうなたら自分がなにをしかすかわからなくて怖い。

「ね、ねえ！ 本当になりたいどうしたの？」

「あ……はい。あのれすね……」

声をかけるとキラキラと好奇心に輝く青紫色の瞳が股間からこちらの顔に移動する。

彼女の注意を逸らせたことに安堵しつつ、普段からは想像もできないような挙動に関心がわいた。

「わたし、和馬さんに……聞きたいほろが、あつて……」

「聞きたい……こと？」

「はい。和馬さんは、どんな女性が好きなのかなつて……」

「はい!？」

自分の女性の好みを聞かれるとは思っていなかったので声が裏返った。

「他にもいろいろ聞きたいことがあつたんれすけど……でもそれは今度にします」

「え？」

「だって和馬さん……なんらか苦しそうだから」

そうつぶやくと、ほんのり赤く染まった顔をふたたび股間に近づけてしまう。

「わ! これこらなにしてるの!」

「和馬さんこそお……なにしてたんですか?」

「う……」

痛いところを突かれた。正直に答えていいものか、いやそれはまずいだろうと心の中で自問自答していると、猫耳少女はくすくす笑う。

「パンツ下ろしてたつてことはあ……。マスターベーション、というのをしようとしてたんれすか?」

「あ……そ、う、です。よくご存知で……」

「だってえ……ふふっ……保健の授業で習いましたもん。教科書には、性器に刺激を与える……としか書いてなかったんれすけど……。そのやり方って……こうですかあ？」

「へ……………はう!!」

すみれはためらいなく竿を握るとぐいぐいと上下に手を動かした。それはいやらしい手つきとは言いがたく、男根を引きちぎろうとするかのような扱いだ。

「いだだだ……！　ちよ、痛いよ！　いててて……っ」

悲鳴をあげるとすみれがぱつと手を離してこちらの顔を心配そうに見上げてきた。

「ご、ごめんなさい、痛かったれすか？　おかしいな……漫画はこんならつたのに……」

「漫画!!」

「それじゃ……これならどうですか？」

少し柔らかくなつた肉棒を前に、すみれは一瞬ためらうようなそぶりを見せたが、おずおずと舌を出して先端をぺろりと舐めた。

熱く湿つた肉の感触に、背筋がビクンと伸び上がる。

今度は気持ちよかつた——いや、そうじゃない。そんなことを思つてはいけない。後に引けなくなる前に即刻これをやめさせなければ。

（でもいいのか？　すみれがこんなことしてくるなんて、もう二度とないかもしれないんだぞ？）

ふいに欲望という名の悪魔がささやきかけてくる。酒が入っている上にもともと悶々としていたので男の欲望がはちきれんばかりになっていった。

(でも、こんなのは間違つて……うあ!)

すみれが先端の膨らみをぱくりと啜えた。

(……あれ?)

ただ啜えただけだった。特になにかしてくるでもない。

戸惑っていると、彼女もそれがわかったのか、口を離して不安そうにこちらを見上げてきた。

「気持ちよく……ないれすか?」

「え? あ、いや、そんなことは……」

どう答えたものかと思っていると、少女は猫耳を伏せてしゅんと肩を落とした。

「ごめんなさい……。実ははじめてなのれ、どうしたらいいかわからないれす。だから、どうしたら和馬さんが気持ちよくなれるか……教えてもらえませんか?」

「え、えええ!!」

「お願いします」

(だめだつて言わなきゃ。なんでこんなことをするのか聞かないと……)

頭ではそう思うのに、潤んだ瞳で言われると正常な判断もできなくなっていく。

気がつけば違うことを口走っていた。

「じゃあ……もう一回口に入れてみて……?」

「……はい……」

頬を染めて返事をするすみれに和馬ももう降参するしかなかった。

（今回だけ……。こうなったら、今回だけはお言葉に甘えよう）

亀頭がふたたび温かく湿った口腔に包まれる。そのままの状態の上目遣いをする猫耳少女に、ごくりと生唾を飲み込んだ。

「そ、そしたら、舌先とか舌全体を使って……いろんなふうに舐め回したり、強く吸ってみて？ 歯は立てないようにね」

「ん……………」

すみれはこくんとうなずき、口に含んだ先端のすべらかな傾斜の上を舌先でこちよこちよとくすぐってくる。神経の集中するそこを肉の突起が幾度も走り、それだけでむず痒くなるような愉悅が腰を揺らめかせた。

「あ！ そ……そうそう……。う、いいよ……」

思わず褒めると、彼女は自信をつけたのかもっと大胆に舌を使い始めた。

熱くぬめる舌面全体を使って亀頭のくびれ部分を左右に何度もねっとり舐め回し、かと思えば尖らせた舌先で神経の集まったエラを強く弾かれる。股間から腰、背筋にかけて神経を焦がすような痺れが走り、全身を深い快感が包み込む。

拙いながらも多彩な舌使いを披露され、和馬は瞬く間に与えられる刺激に夢中になった。「う、すごいよ、すみれ……。っ。それ、気持ちいい……。！」



今まで彼女がいたことはない。だが会社の先輩に連れられてピンサロに三度ほど行ったことがあったので、これが初めての体験というわけではなかった。実は本番も一度経験している。しかしプロにされたどのフェラチオよりも、すみれの口淫は飛び抜けて気持ちよかった。

単なる技術ではない、それ以外のなにかが感じられる。

なんとなく——彼女の愛撫には心がこもっているような気がするのだ。

「そう……っ……上手、だよ……」

ぬるついた舌がひらめくたび、腰がびくびく弾んでしまう。もともと勃起していた肉塊が、今や百八十度反り返らんばかりに屹立していた。

その根元を指で支え、すみれは健気に口奉仕を続ける。

「ん……っ、ふ、ちゅぷっ。はあ……あむ……っ」

「あっ、う！ はあああ」

和馬の口から感極まったような声が漏れると、彼女は今度は先端の丸まりを思い切り吸いあげた。

「ひ！ あ、あああ！」

口腔内が真空状態になり、鬱血せんばかりに締めつけられる。だが痛みはまったくない。柔らかい頬の粘膜がまとわりついて、充血した亀頭をぎゅんぎゅん圧迫してくる。それは全身が痺れるほどの強い電流となって腰椎を直撃した。

瞬間、完全に理性が飛ぶ。

思わずすみれの頭を掴み、伸び上がった竿も肉のぬかるみに沈めんと腰を押し出した。

「んぐ!! んふうっ……ん、んん……っ」

少女は頭を押しさえつけられても抵抗しなかった。むしろ喉を開いて口奥へと男根を導いていく。

「あ、ああっ! すごいすごい……!」

和馬はわざとゆったりしたリズムで雄を抜き差しし、彼女の舌と口粘膜のねっとり絡む感触を味わった。

腰を押せば陰茎の根元付近までがどろどろの肉沼に沈み、腰を引けば頬をすぼませたことで硬さを得た唇が竿からカリ首を抜きあげてくれる。

抽送のたびに口腔内に溢れた大量の唾液が、じゅぷつにじゅつ! ちゅぐつぶぢゅつ! と粘着質な水音を奏で、いやらしさに拍車がかかる。

「んっ、んっ! っ……はあ、あむっ……ん、ぶふっ……!」

口を蹂躪されているすみれは少し苦しうにしながらも、とろんとした目で和馬を見上げた。健気に喉奥までも男に差し出し、少女は醜悪な肉棒を一生懸命口で愛撫する。

視線が絡み合った瞬間、腰の痺れが脳天まで一気に突き抜けた。

（すみれ! うううっ、すみれえ……!）

「あ、あああ、も、イク………ッ!」

「ほんとにだめ？ 俺は全然嫌じゃないし、むしろしてあげたいって思うんだけど……」
だめだと言いたいが、間近で好きな男にじつと見つめられてしまうと拒むのが難しい。
返事に迷いが生じると、彼は身体を起こして耳元に口を寄せた。

「約束するよ。すみれのこと、いっぱいイかせてあげる」

「んっ……………」

猫耳に息を吹き込まれてぞくつとする。

官能的な低いささやきに、すみれの下腹部がきゅんと反応した。なけなしの理性がどろりと溶け、抵抗する意思を奪っていく。

「わかり、ました……………」

少女がついに降参すると、男は満足そうにふつと笑った。

腿を持ち上げられ、するりとショーツが剥ぎ取られる。あつと思ったときには内腿の間に彼の身体が入り込み、自然と両脚を大きく開いて膝を立てる格好になっていた。

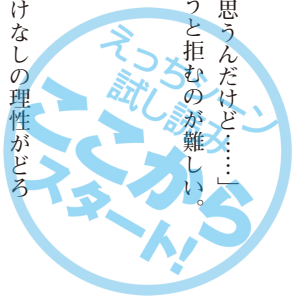
「んっ……………」

ぴたりと合わさっていた金色に翳る肉たぶ。それを左右に捲られてしまう。

「いい匂いがするよ。甘酸っぱくて柑橘みたいな匂いだ」

「やあ……………」

文字通り目と鼻の先に陰部をあてがわれ、全身が燃えるように熱くなる。ささやき声とともに吐息が剥き出しにされた淫華にかかり、濡れていることを余計に意識してしまった。



「い、いい匂いなんかじゃ……ないです……っ」

「そんなことないよ。男だったら皆クラクラするような、おいしそうな匂いだ」

「おいしそうなんで、そ——ひい！」

温かくてぬるりとした感触のなにかが——舌が、ぬちゅつと音を立てて蜜の滴る陰部の下から上へゆつくりと這い上がる。その感触に下腹部がぎゅつと縮こまり、新しい愛液が溢れてくるのが自分でもわかってしまう。

「舐めても舐めてもどんどん溢れてくるね」

言われたとおり、淫らな粘液がお尻のほうまで伝い落ち、割れ目の間をぬるぬるといやらしく濡らしていく。和馬は指で押さえた陰唇の敏感な内側を丹念に舐めては舌先で蜜口をちよつとだけつつく行為を繰り返した。

「や、ああんっ。だ、だめ、そんなこと、しちゃ……っ。……ふ、あ、あんっ！」

「——思ったとおり、すごくおいしいよ。甘くて、少しか海の味がするね。……もつと欲しくなる」

「やあつ、舐めちゃだめですっ。そんなのおいしくないし、おなか壊しちゃ……あぁッ」

やめてほしいのに、和馬はわざとびちゃびちゃ音を立てて小さな二枚の襷を舐めては捏ね回している。

「ひっ、ひいん！ いやあ……そんなに舐めちゃ、だめですう……っ」

覚悟していたとはいえ、やはりそんなところを舐められるなんて信じられない。そして

舐められるほど全身がビクビク引き攣るほど気持ちいいことも信じられない。

さらに――。

(やだ……。わたし、物足りなくなってる……。?)

ピンク色の霞がかかる頭で、すみれはもつと別の場所を……。縁のところだけでなく、大事な場所の一番中心を舐めてほしいと思ってしまう。

そんな自分がひどくいやらしく思えてシヨックを受けるが、それもすぐ快感の波に流されてどうでもよくなってしまう。

「おかしいな。アソコがすぐくヒクヒクしてる。えっちな蜜もどんどん出てきてるけど、どうしたの?」

舌の動きを止めて、彼は股間の間からこちらを見つめてきた。物知りの彼はきつとわかっているはずなのに、あえて聞いてくるのがずるい。そんなこと、恥ずかしくて言いたくないのに。

「ど……。どうもしてませんっ。ひ、ヒクヒクだなんて、してません」

「ほんと? 嘘言ってない?」

「ほん――ああっ!」

唾液を絡ませた熱い舌が、待ち焦がれた淫華の中心にぬぢゅつと覆いかぶさる。そのまま振動させるように秘裂の間を小刻みに揺さぶられて、すみれは目を見開いた。

「あつ、んああ! や、かず……。んん! つふ、あ、あ……。あんっ、あ、ああ……。!」

抑えようとしても声が勝手に漏れてしまう。ぐにゅぐにゅした肉の塊が小陰唇の間を往復し、蜜口に密着して淫らな粘液を吐かせようと揺さぶってくるのだ。

全身から力が抜けていくようなぞつとするほどの心地よさと、じつとしていられないほどの愉悅に腰がくねくね踊ってしまう。

もつともつとしてほしくて、気持ちよくなりたくて、すみれは思わず和馬の頭を抱えて股間に押さえつけた。恥ずかしいけれどそれ以上にもつと快感を得たくて、自らの性感帯に導くようにつま先立ちになり、はしたなくも腰を振りたくる。

「あんっ、か、和馬さん……。わたし……。ッ……。おかしいです……。こんなこと、だめなのに……。気持ちいいの……。っ。舐められると変に、すぐく変になるんです……。！」

異常な興奮を覚えながら異変を伝えると、彼はますます舌をひらめかせた。

舐められるほどに蜜口の奥がひどくむず痒くなる。下腹部の中がきゅんきゅん引き攣つて、そのたびに和馬の言うとおり、アソコが物欲しそうに蠢くのがはつきりわかってしまう。「ごめんなさい……。わたしのアソコ……。ヒクヒクしちゃってます……。っ。いやらしいっと思うのに、勝手に動いちゃうんです。わたし、どんどんエッチになっちゃう……。ッ」
身体の昂りに合わせて声がうわずった途端、快感で緩んだ未開拓の洞穴に、男の舌先がじゅぐっ！ と押し込まれた。

「ひぐうッ！」

ごくわずかな挿入でも、すみれは過敏に反応し——全身をビクンと震わせた。

熱い舌が蜜口のごく浅い箇所をねっとりした動きで抽送してくる。

「あ、あああ……！！ いやあ……も、だめっ、だめえ！ そ、らに……ぐちゅぐちゅしちや、や、ああ！ へん、なる……ッ……変なつちやうう……！！」

ぬぼつちゅぼつ、くぼつちゅぶつと淫猥な音が部屋に溢れて、姫穴だけでなく耳の穴まで犯されているような錯覚に陥る。

敏感な粘膜を分厚い肉が掻きわけるとき、腰が浮き上がるほどの愉悅が走った。子宮がきゅんきゅん引き攣って奥から洪水のような粘液を滴らせる。

「ひっ……いやいやいやあ……！！ いいれすっ、アソコの入り口、気持ひよすぎますう！ イ、イク……！ かずまさんっ、わたし、もういき—— ああああああああ！」

すみれの視界が白く爆ぜた。

しなやかな肢体をビクビクと痙攣させ、青紫色の腫をうわずらせながら少女は激しく達する。その最中、ふいに股の間から熱が消え——顔や身体に熱い液体がかけられた。

ややして絶頂から解放された少女は、部屋の中に恥ずかしくも胸を焦がすような自分の蜜香と——草刈りあのような青臭い匂いが充滿していることに気づいた。

「あ………？」

ようやく周囲の気配が感じ取れるようになると、自分の上で人影が肩で息をしているのが見えてくる。

顔や胸、そしてお腹の上に違和感があった。べちよりとした温かい粘液がかかっている



ようだ。

「ふう……。俺も一緒に……。イッチャった」

「え……。かずまさんも……？」

「ということ、まさかこの粘液は――。」

「せいし……？」

嗚然としている間に和馬はジーンズとシャツを脱いで足元に跪き、放り出していた足を肩に載せてしまった。ふたたび陰部が彼の目に晒されるが、身体から力が抜けていて隠すこともできない。

「すごいな。クリが勃起して半分皮が剥けちゃってる。……クリってわかる？ 教科書には陰核って載ってるところだよ。女の子の、おちんちんのところ」

「おちんちん……？」

「そうだよ。太くて長くて硬い、男のアレと一緒に」

言葉のまま想像してしまうと、下腹部によじれるような甘い痛みが走った。アソコもひくんっひくんっ大きく動き、蜜がこぼっと吐き出される。まるで本能がそれを渴望しているかのようだ。

「男と一緒に、女の子もここを弄られるのが好きなんだよ。ここが一番気持ちよくなれる場所だから」

「え……。一番……？」

先ほどの也十分すぎるほど気持ちよかったのに、それよりさらに気持ちいいのがあるのだからか。

ぼんやりした頭でそう思っていると、その陰核を唇で挟まれた。

「あう！」

にちゅつにちゅつと扱かれると今までで一番激しい快感が走り、身体が布団の上で大きく反り返る。舌が剥き出しの秘玉をころころ転がすと、その動きに合わせて断続的にいやらしい声が出てしまう。

「あつ、ん！ あつ、あつあつあつあつ、やつ、ああん……っ！」

腰が引き付けを起こしたようにビクビクと揺れてしまうが、足を肩の上に固定されている上、暴れる腰まで彼の手にながちり掴まれて逃げることはできなかつた。目から火花が出そうな刺激に下腹部とつま先が引き攣り、瞬く間に身体が緊張していく。

「あんっ！ く、クリ、らめえ！ クリあすごすぎるのお！ ああんっ！ ああつ、ま、またイキそ、です！ クリで、クリでイッちやう……！！ イッちやうううううう！」

一度イクと次の絶頂までの間隔が短くなることをすみれは身をもって知った。

つま先で虚空を搔きながら激しく達すると、和馬は解放するどころか一層激しさを増して舌で秘玉を強く弾き吸いついてくる。かと思えばまた蜜口に舌を挿入され、ぐりぐりと姫穴をほじられてしまう。

絶頂から降りてくる途中で二度三度と高みへ押し上げられ、すみれは強烈な快感に涙と

涎よだれをこぼしながら喘ぎ叫んだ。

「いやあ！もおだめれすつ、だめなのお！クリも、ほじほじも、だ——あああああああああ！………あ、はあつ、は、つあん！ああ、またイツちやつ………あ！あつあつあつあつ！あ、いや、いやあ！またイツ——ひいいいい！」

愛液はこんこんと湧き出る泉のように垂れ流し状態で、股間からは舌が動くたびピチャピチャとものすごい水音がしていた。

全身が強烈な痺れに襲われ、快感が神経を焼き尽くす。

「あうあうあう！あうう、らめえ……！はっ、はああつ……はああああつ」

痛みや気持ち悪さはないが、想像を絶する背徳的な悦楽にすみれは完全に恐怖する。気持ちよすぎることが、あまりに淫らな快感に忘我していくのが恐ろしくてたまらない。

その気配を敏感に察知したのか、和馬はふいに身体を起こすと、すみれを安心させるようにぎゅつと抱き締めた。

ようやく激しい舌責めから解放されて、すみれも安堵のあまり深い息を吐きながら男の身体にしがみつく。何度もイキすぎて全身が倦怠感と疲労感に包まれていた。腹筋もずつと力が入っていたためカチカチに強張っている。

彼の素肌は汗でびしょびしょに濡れ、男らしい香りが鼻をくすぐった。思えばこうして抱き締められるのは、この家へやってきた直後以来だろう。直に肌と肌を密着させながらぎゅつとされると心も身体も熱くなる。このままどろりと溶けてしまいそうだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

魔界転生
ラブコメディ

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?
ジャンルはわからない
ドキドキラブ!

呪詛嬢の師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説シリーズ!

女刑事美優

美優は自らの身体から

リアルドリーム文庫



あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫

あの人気作品の
外伝作品もあっ!!
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化!!

二次元ドリーム文庫

異世界で
手に入る
珠玉の
ライトノベル?